

## 訳注出雲名勝摘要(五)

要 木 純 一

### ○潜戸くまど

島根郡、加賀浦、神崎ニアリ。窟門高サ四間、広サ二間乃至八間、長サ凡ソ二町許リ。一洞アリテ北ニ向フ。抑此窟ヤ、太古、支佐加比比売命ノ佐太大神ヲ産ムトコロニシテ、菅北方ノ一洞アリテ、窟内常ニ黯々焉、大神之レヲ厭ヘ、金弓ヲトリ、一射シテ、西ヨリ東ニ通ス。於是、窟内為メニ耀ク。是レ即チ今ノ東西兩門ナリ。社ヲ建テ、支佐加比比売命ヲ祭ル。

【訳】潜戸は、島根郡加賀浦神崎にある。洞窟の入り口は、高さ四間(約七・三米)、幅二間(約三・六米)から八間(約一四・五米)、長さ、全部で二町(約二二・八米)くらいである。さらに北に向かつて洞窟がもう一つ開いている。さて、この洞窟は、大昔、キサカイヒメの神が、サダの大神を産したところで、そのころは、北側の洞窟が一つあいているだけで、洞内はいつも真つ暗、サダの大神は暗いのはいやだと思つて、黄金の弓を手にとって、ひとたび射ただけで、一気に西から東に射通した。その結果、洞内は光に満ち満ちて輝いた。これこそ、現在の洞窟の東と西の二つの入り口なのである。洞内に、神社があつて、キサカイヒメの神を祭っている。

【注】潜戸―加賀の潜戸。松江市北部、島根町にある景勝地。潜戸とは、くくりど、すなわちくぐるような入り口、海中洞窟のことであろう。古代、「くぐる」は濁らずに「くくる」と発音することが多かった。二語の合成語は、上古から、通例、下語の語頭が濁音になるので、「と」は「ど」となる。また、二字目の「く」が「き」や「け」になつた。現在は、「くけど」の読みが一般的。これが、山陰方言における、母音の中舌化によるのか、あいまいな発声の

ために表記に混乱が生じたのか、わからない（山陰のみではなく、近世普遍の現象のようである）。『出雲国風土記』記載の「川来門大浜（かわくどのおおはま）」一本に「久来門（くきど）大浜」は、現在の加賀漁港を中心とした加賀浦の浜全体をさすようであるが、あるいはこの地名との混乱があるのではないかとも考えられる。ここでは、本文和歌中の仮名表記により、「くきど」と読んでおいた。海寄りの「新潜戸」と陸寄りの「旧潜戸」の二つの洞窟がある。新潜戸は元来「神潜戸」で加賀神社の神域であった。本項の潜戸はこれである。旧潜戸の方は、「仏潜戸」と呼ばれていたらしく、賽の河原で有名な信仰の場であり、漢詩、和歌、俳句の題材となる、観光地的な名勝といいがたかったので、本書では言及がないのであろう。新潜戸は、この序にあるように、東西北の三つの入り口がある。加賀の港から、舟に乗って、遊覧する。潜戸の名称がいつ生じたのかは、つまびらかにしないが、早く、『出雲国風土記』にこの洞窟に対する言及がある。『出雲国風土記』嶋根郡加賀郷の条、

加賀郷 郡家西北廿四里一百六十歩。佐太大神所生也。御祖神魂命御子、支佐加比比賣命、闇岩屋哉、詔、金弓以射給時、光加加明也。故云加加。〔神龜三年改字加賀。〕（加賀郷 郡家西北廿四里一百六十歩。佐太大神の生まるる所也。御祖神魂（かみむすび）命の御子、支佐加比比賣命、闇き岩屋哉と詔げて、金弓以て射給う時、光加加明（かかあく）也。故に加加と云う。〔神龜三年（七二六年）字を加賀に改む。〕

この部分は『風土記』の古本になく、江戸時代、他書や伝承から補綴したものといわれるが、幕末、星野文淑やこの頃の和歌の作者達は本文と見なしたのであろう。「支佐加比比賣命」は、テキストによっては「佐賀地売尊」等に作っており伝承の混乱を思わせる。また、「加賀神崎」の条には、

加賀神崎 即有窟。高一十丈許。周五百二歩。東西北通。（加賀神崎 即ち窟有り。高さ一十丈許り。周五百二歩。東と西と北は通ず）

とあって、その小字注に、

所謂佐太大神之所産生処也。所産生臨時、弓箭亡坐。爾時、御祖神魂命之御子、枳佐加比比賣命願、吾御子、麻須羅神御子坐者、所亡弓箭出来、願坐。爾時、角弓箭、随水流出。爾時、取之、詔子、此者非弓箭、詔而、擲廢給。

又金弓箭流出來。即待取之坐而、闇鬱窟哉、詔而、射通坐。即、御祖支佐加地比売命社坐此処。今人、是窟辺行時、必声磅礴而行。若密行者、神現而飄風起、行船者必覆。(所謂佐太大神の産生(あ)れましし処也。産生れましし時に臨みて、弓箭亡せ坐しき。爾の時、御祖(みおや)神魂命の御子、枳佐加比比売命、願ぎたまひしく、吾が御子、麻須羅神の御子に坐さば、亡せし弓箭出で來と願ぎ坐しき。爾の時、角の弓箭、水の隨(まにま)に流れ出づ。爾の時、之を取りて、子に詔りたまひしく、此は弓箭に非ずと詔りたまいて、擲げ廢(う)て給う。又金弓箭流れ出で來。即ち待ち取らし坐して、闇鬱(くら)き窟なる哉と詔りたまいて、射通し坐しき。即ち、御祖支佐加地比売命の社、此処に坐す。今の人、是の窟の辺(ほとり)を行く時に、必ず声磅礴(とどろ)かして行く。若し密かに行かば、神現れて飄風(つむじ)起り、行く船は必ず覆る)

テキストが乱れており、読み下しも諸説ある。この乱れが、逆に和歌作者達の想像力を刺激したようである。黒沢石齋の地誌『懷橘談』の以下の記述も興味深い。『風土記』を引用しつつも、民間伝承をまじえている。

#### 加賀

加賀の郷、本かゝと書く。加賀の神崎に窟あり。一十丈計。周五百二計。東西此道、大神の産まれ坐し給ふ所なり。産まれ坐しし時に臨んで、弓箭を失ひ給ふ。然る時に御祖神魂命の御子枳佐売命願はくは、吾御子麻須羅神の御子坐して、亡ひ給ふ所の弓箭出來らんと、願ひます時に、角の弓箭、水にしたがひ、流れ出づる時に、御子は我弓箭に非ずと、詔りて擲すて給ふ。又、金の弓箭流れ出来る。即ち待つ所に坐して闇鬱窟哉と詔りて、射返し坐す。即ち御祖支佐加地売命の社、此所に坐す。今の人、この窟の辺に行く時、心声磅礴して待つ。若し密に行けば、神現して颯風起り、行舟必覆ると古記に見えたり。我此度加賀の神窟はまかりしに、記せしが如くなり。窟の内水のはやき事矢の如し。故に小舟に乗り、櫓槳なくして、行く事すみやかなり。数十間行きて東西へぬける穴あり。俗に是を潜戸(クケト)といふ。窟の中にて仰ぎ見れば、乳の形ありて水滴る。伊弉冉命すみ給ひ、此潜戸に坐して、天照大神を生み給ふ。故に乳房の形、岩となり、其露のしたゝり絶えず。海中の草、此乳味に潤をうくるにより、其味旨きなり。又、浦の女、必左の乳大なるは、此窟の乳も左大なるが故なり。(中略)此浦をかかといふは、大神生れ給ふ所

なるにより、今の人に至るまで、母をか、といふなど語り侍る。古記には見えず。情思ふに、かかあるは、母の御崎又はいろの神崎などこそいふ可きに、いかにぞや。凡そ、小児は、言語不明ゆゑに、上の一字はいひ侍れども、下の文字にうつる弁舌ならざる故に、下の仮名を踊りていふ類多し。母を上といへばか、といひ、父を殿といひ、亭といふを、と、といひ、て、といふが如し。これ皆後世の言葉にして、神代にか、といふ可らず。恐らくは、俗言なるべし。佐陀の小縁起といふを見侍りしに、書きたりしは、此所加賀と名づくる事、伊弉冉命、潜戸に棲みて、未だ出で給はざる時、天下暗きなり。潜戸を出で給ふ時、天下明かなり。其の時、伊弉諾命、嗚呼赫奕（かくやく）と宣ふ故に、其地をか、と名づくとあり。此神窟より、加賀の浦へ半里、か、より水の浦へ一里の会場なり。隱岐国も石見瀨も間近く見え侍る。細川玄旨、此所にて、狂歌に、

あはれにも未だ乳をのむ海士の子のか、のあたりやはなれざるらんとよみしとなり。（以下略）

『雲陽記』や『出雲嶽』等の地誌、筆記も、同様の記述を襲っている。後半の『風土記』にない民間伝承の部分（石斎は荒唐無稽と批判しているが）に、序は言及していないが、也丈の俳諧はこの伝説をもとにしている。江戸時代には、「加賀」に「嬢」を当てることもあり、かかあ＝母の伝承があったことがうかがえる。また、風土記以来、「かか」と二字目の「か」を清んで読み続けていたこともこれでわかる。島根郡―現在の松江市北部、松江市の島根町、鹿島町、美保関町が主たる部分を占める。古く、「出雲国風土記」に記載され、律令制でさだめられた郡名で、後世に引き継がれていったが、ここでは、本書出版の前年、明治十二年に成立した行政区画。「島根秋鹿意宇郡役所」が松江城下に設置され、秋鹿郡・意宇郡とともに管轄。明治二十九年、郡制が施行され、この三郡が合併して、八束郡となった。加賀浦―現松江市加賀。江戸時代から明治初期は、海岸の集落を浦と呼んだ。明治十二年島根郡下となり、明治二十二年、町村制の施行により、加賀村になった。明治二十九年八束郡下になり、昭和三十一年、大芦村・加賀村・野波村と合併して島根村が発足。昭和四十四年島根町となり、さらに平成十七年松江市に合併した。神崎―潜戸のある半島。神のいる岬の意。「かん（む）ざき」の読みが一般的だが、和歌ではわざと「かみさき」と音便

なして清んで読むことがあったかもしれない。窟門―洞窟の入り口。あまりこなれない語。あるいは日本語の「いわやど」を漢字にしたか。以下の記述が実見によるのか、何かの資料によるのか不明。高サ四間―実際も数メートル。『風土記』の十丈（三十米）は、現在の尺貫法と違うにしても大きすぎる。広サ二間乃至八間―広さは幅のこ。これも実際と同等。狭いところは船が壁にぶつかって危険。真ん中あたりに大きな空間がある。長サ凡ソ二町許リ―「凡そ」は「すべてで」の意。全長。実際、東西間は約二百米。一洞アリテ北二向フ―『風土記』にあるように、東西北の入り口がある。抑―発語の辞。話題転換して、新しい段落を始める。此篇ヤ―「ヤ」は漢文における、主題提示、強調の助詞「也」の訓読かとも考えたが、「このいわやや」は口調が悪い。「いわや」の送り仮名であろう。「いわや」は、岩壁にできた洞穴で、古代人にとっては、住居（屋）になりえた。「岩屋」とも書く。太古―神代と同じく、神々がいた人知では計り知れない時代。支佐加比比売命―『古事記』の蜷貝比売（きさかいひめ）にあたる女神。赤貝が神格化したもの。赤貝の貝殻に縦筋が「きざ」まれていて、「きざきざ」になっているからであろう。実は、この名前には異同があり、『風土記』の原文では、「枳佐加比売（キサカヒメ）命」等となっているテキストが多い。伝承の不確かさを物語る。この項及び門脇重綾は、『古事記』に合わせて、「支佐加比比売命」が本来の形と考えているようだ。古事記では、たくさんの兄神（八十神）に妬まれた大國主命が、猪だと嘘をいわれて、山上より転がした焼ける岩を抱き止めて焼け死んだところへ、神産巢日之命（造化三神の一）の命令によって、キサカイヒメとウムギヒメが派遣され、キサカイヒメが「刮（きさ）げ集め」、ウムギヒメが「持ち承けて、母の乳汁を塗り」、治療すると大國主命は蘇生したとある。『風土記』では、キサカイヒメは、神魂命の御子神で、加賀の神埼で佐太大神を生んだことになっている。『古事記』と『風土記』の内容の違いはもとより、『風土記』内部でもいろいろの不明点、矛盾点があり、これが逆に歌人達の想像力を刺激したものと思われる。佐太大神―『風土記』のみ登場。現佐太神社（松江市）の主神。律令制が定まる前に大きな狭田国と呼ばれる地域があって、その地域の信仰対象であったと言われるが、出自に不明部分があり、その不可思議さを歌人達は創作にたくみに活かしている。『古事記』の猿田彦神に比定する説があった。「さだ」と濁って読むのが一般的。菅北方ノ一洞アリテ―『風土記』には

明言していないが、東西北に入り口があつて、「射通し」たというので東西方向に穴があいた、だから、最初にあつたのは、北の入り口ということになる。ただ、洞窟の内部から、矢を射たのなら、一回で東西を射通すことは不可能。重綾及び歌人達は、このあたりの議論、憶測、不可思議を楽しんでいるようである。黯々焉―『風土記』の「闇鬱窟哉」に当たる部分を漢文調にした表現。陳琳・遊覽其二「蕭蕭山谷風、黯黯天路陰」。「黯」「暗」「闇」は、同音で通用する。「黯黯然」は、近世の中国語にあるようだが、「黯黯焉」は用例を見ない。神之レヲ厭へ―「厭ヒ」とあるべきところ。これもイ段とエ段の混乱。金弓ヲトリ―『風土記』の加賀郷の条（後補部分）による。加賀神崎の条に「角弓箭」を捨てて、「金弓箭」をとつたとあるから、黄金ではなく、金属製（鉄製？）の弓箭のことと思われるが、後述の如く、歌人たちは想像力をたくましくしている。一射シテ西ヨリ東ニ通ス―洞窟内部から矢を射たのなら、本当は一たび射て東西貫くのはおかしい。『風土記』は一射とはいわない。一気に貫くというような語感で用いているか。西の入り口の先には、真ん中に丸い穴が空いた島があつて、この際飛んできた矢がさらにこの島を貫いたという伝承がある。為メニ耀ク―「為メニ」は「これが原因で」の意。「輝く」は古く、「カカヤク」と清んで読んだ。だから、『風土記』に言うように、「加賀（カカ）」の呼称が生まれるのだが、この序では、そこに関心はないようである。果たして、弓が輝いたのか、矢が輝いたのか、それとも洞窟に外光が入ったのを輝くといったのか。はなはだ不審だが、門脇重綾は矢を投げて、壁が破られて（外光）により輝いたと考え、島根の歌人達は、弓自体が輝き、それで、洞窟も輝いたという。説の齟齬を、それぞれが楽しんでるようである。是レ即チ今ノ東西両門ナリ―「是即」は「これこそが」と強調する措辞。社―『風土記』記載の「加賀社」のこと。『延喜式』にも記載。もともとは潜戸の中に、神社があつた。江戸時代に海水に流され、移転したという。その年代、経緯は不明。現在、加賀神社として、神崎のみさきの根元、島根支所の向かい字向田にあり、枳佐加比売命を主祭神とし、伊弉諾尊、伊弉冊尊、天照大神、猿田彦命を配神としている。潜戸の中には、神社跡として、小さな鳥居が置かれている。江戸時代は、「潜戸大明神」と称したらしい（『雲陽誌』、『角川日本地名大辞典 島根県』）。

出雲のや 加賀のみ寄の 奇しきや ぐきとのみ戸は 常暗に 闇き岩屋と 麻須羅神 投矢射放ち 其岩を 通  
 しましきと 西刺 東門より 西門にし 行むかへは そともなる 北の大門そ はしめより 然ありけらし  
 大海原 八重折る波は 雲井なす 澳にひろこり 壁立てる 岩穂にくたげ うつらなる 此窟戸も た、ゆりに  
 ゆりかくやすと おもふまで 聞のかしこく 現にし 見のあやしく 千早振 神のみあとと 語継ぎ いいつく  
 なへに 出雲人の 吾にかたらく づらくに いにしへおもへは 天なるや 吉佐貝比咩の 大名持 神のみこと  
 の 現身を ひたしいかすと けたしくも こゝに來まして 八十神を 避てましけん あと、ころ かくこそあ  
 れと つばらかに かたるをきは うへしこそ 八洲の国の 國中とも おもほえなくも 現世に こゝたさか  
 りて あやしくも 神さひたてれ 是の神崎  
 ぐきとより 吾漕來れば まかみふる 妹か櫛島 波のまにみゆ

【訳】 ああ、この出雲の、加賀の岬の、靈妙あらかたな、潜戸の洞穴は、永遠の闇に包まれた、真つ暗な洞窟だなあ  
 と、立派な神である佐田大神はおっしゃって、矢を手でお投げになり、その岩を突き破られたという伝説がある。そ  
 こで、今、東の入り口から、西の入り口に向かつて舟をこいでいくと、外の方の北の大きな入り口は、神が生まれる  
 前から、こうであったのだらうと思われる。大海の、幾重にも重なる波が、雲がもくもくとたっている遠い沖に広が  
 り、壁のようにそびえ立つ大岩にぶつかって碎け、空っぽのこの洞窟の入り口も、ひたすら、ゆれにゆれ続けて崩れ  
 落ちてしまうのではないかと、思うほどに、その轟音は聞いて恐ろしく、現実世界にこんなことがあるのか、と見て  
 不思議な気がするが、(ちはやぶる)偉大な佐田大神のいらつしやったご遺跡だと、代々語り継ぎ、言い継いでいる。  
 ところが、一方、地元出雲の人が私にこう教えてくれた。あれこれじっくりと、昔のことに思いを致してみると、天  
 の神である、キサカイヒメの神が、オオナモチ(大国主命)の神の、お体を水に浸して、生き返らせようとして、お  
 そらくはここにいらつしやって、悪い兄弟のたくさんの神を避けてらつしやった、そのあとが、このようになってい  
 るのだと、そうくわしく語るのを聞くと、なるほど、わがやしまの日本国の中のこととは思えない、現世にもこのすこ

く離れたこの土地は、不思議で神秘的な雰囲気になり満ち満ちていることだ、この神崎は。

(反歌) 潜戸をぬけて、私が船をこいで帰ってくると、かわいい女性が黒髪をとく櫛のような、そんな小さくてかわいい櫛島が高い波の間に見える。

【注】川勝(門脇)重綾―原文は川勝。門脇の間違いなので正す。一八二六から一八七二。江戸時代後期の鳥取藩士。国学者。歌人。勤王家。名和長年の頭彰で有名。おそらく星野の草書による作者名メモを刻字工が読み間違えたと思われる。この長歌及び反歌は、門脇重綾の没後歌集『蝮園集』にも掲載。『蝮園集』は明治十一年出版なので、該当部分をそのまま『出雲名勝摘要』(明治十四年出版)の原稿にしたのであろう。両者は、仮名と漢字の部分や送り仮名がほぼ一致しており、忠実に複製したようである(但し変体仮名の種類や書体は違う)。門脇重綾はかなり名を知られた、勤王家、歌人で、『蝮園集』には門脇重綾の名が楷書体で書かれた部分があり、川勝姓は山陰に少なく、門脇は山陰に多い姓だというのに、なぜこんな間違いを犯したのか、不思議なことである。これも『摘要』が星野の体調不良のために、校閲が行き届かず、倉卒の間に出版されたことを思わせる。『蝮園集』は近年翻刻された(『蝮園集』門脇重綾遺稿歌集…翻刻)境港歴史学会 二〇一六)。この本によつて、いくつか間違いを補正することができた。記して感謝の意を表す。また、同書付録の門脇重綾年譜によれば、重綾は、晩年近く、明治四年頃、神祇省の役人として、出雲等の諸神社へ出張したとあり、この時期のものではないかと思われる。もちろん、彼は若年から各地を旅行しているので、江戸末期に時代がさかのぼる可能性もある。出雲のや―柿本人麻呂「石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか」にならったのであろう。「や」は間投詞。「ああ」というような感慨を示す。あの有名な、とか、こんなに遠くで一生来るとは思わなかったところに、今私がいるという、不思議さを強調する。加賀のみ寄の―み寄は岬。門部石足「みさき(三崎)廻の荒磯に寄する五百重波立ちても居ても我が思へる君」、藤原房前「妹がため玉を拾ふと紀伊の国の由良のみさき(三崎)にこの日暮らしつ」。「み」と翻刻した原字は、「三」の草書体。万葉集で「三崎」または「三崎」となっているのに做った表記。あるいは、神性を宿らせるものとしてみさきをとらえ、「み(御)」を、「みさき(海面に突き出た地形)」につけたと解釈して、このような表記にしたか。奇し

きや―靈妙な力をもち、神秘的で摩訶不思議なさま。若年魚麻呂「海神はくすしきものか淡路島中に立て置きて」。長田王「聞きしごとまこと尊くくすしくも神さびをるかこれの水鳥」。くきとのみ戸は―「くすし」、「くきと」と「く」の音を重ねる。「みと」は、水戸。水門。海水の出入りする狭い所。また、大河の海にはいる所。土佐日記「夜なかばかりに舟を出だして阿波のみとを渡る」。『万葉集』、『古事記』、『日本書紀』では「みなと（水門）」とも。常暗に―柿本人麻呂「天雲を日の目も見せず常闇に覆ひ賜ひて」。中臣宅守「逢はむ日をその日と知らず常闇にいづれの日まで我れ恋ひ居らむ」。聞き岩屋と―生石村主真人「大汝少彦名のいましけむ志都の石屋は幾代経にけむ」。「と」は「とて」、と思つて、だというわけで、の意。上代風の言い方。麻須羅神―『風土記』による。「増す」に接尾語「ら」の付いた語。神や男性の雄々しくりつばなようすをいう語。また、そのような神や男性。大伴家持「しなごかる越を治めに出でて来しますら我すら」。この麻須羅神を佐太大神と同一に重綾はみなしているようである。「麻須羅神なる御子」と読んでいるのであるが、「麻須羅神の御子」、即ち、どのような神であるのか不明であるが、麻須羅神はキサカイヒメの夫、佐太大神の実父にあたと考へるのが一般である。おそらく、歌にしたときの格調の高さを考へて、わざと原文を離れてこのように詠んだのであろう。投矢射放ち―弓を使わず、矢を直接投げたということであろうか。『風土記』では、「弓箭」とある。万葉集三三四五「葦辺行く雁の翼を見るごとに君が帯ばしし投矢し思ほゆ」。柿本人麻呂「引き放つ矢の繁けく」。大伴家持「投矢持ち千尋射わたし」。投矢はまた「なぐるさ」と読んで、枕詞（「さ」は矢の意）。投げた矢が遠くまでいく意で、「遠ざかる」にかかる。ここは、枕詞ではないが、万葉調の語として、幾ばくか意識していたかもしれない。万葉集三三三〇「なぐるさ（投左）の遠離り居て思ふそらやすけなくに歎くそらやすけなくに」。「投矢」という古代風の言葉を使って、弓矢全体を表したというように、単純に考へるべきか。その岩を通しましきと―柿本人麻呂歌集「隠りどの沢泉なる岩が根も通してぞ思ふ我が恋ふらくは」。この歌では、通したのは矢ではなく、水ではあるが、意識はしたのであろう。西刺―日にかかる枕詞。赤い色がさして、美しく照り輝くことから。東にかかる用例は見えないが、「ひがし」の「ひ」にかかると考へたのであろう。柿本人麻呂「あかねさす（西刺）日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも」。東門より西門に

しー」と(門)は入り口。複合語なので「ど」と濁って読んだが、和歌としては「と」と清んで読むべきかもしれない。い行むかへは「い行く」の「い」は接頭語で、「行く」の万葉調。大伴家持「沖つ鳥い行き渡りて潜くちふ鯨玉もが包みて遣らむ」。万葉集七九「あをによし奈良の都の佐保川にい行き至りて」。厳密には「ゆく」は単なる移動、「向かう」はその方向に向かう。移動して(西門に)向かうという複合動詞。万葉集三三二四「行き向ふ年の緒長く」。それもなる―「それも」は外面。「背そつ面おも」の音変化。従って、後の方を本来指す。ここでは東西方向を外れた方向。また、『万葉集』では、日の当たらない、山の背になる、北方地域のことを「それも」ということも意識するか。『風土記』にも「北門佐伎之國」という記述がある。柿本人麻呂「やすみしし我が大君のきこしめすそも(背面)の国の真木立つ不破山超えて」。「なる」は「にある」、存在を示す。北の大門そ―『雙園集』では、「北の大門は」に作る。こちらの方がよいであろう。大門と言えば、柿本人麻呂「燈火の明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見ず」。ただし海峡の意味であるが、いずれにせよ、水の行き来する(相対的に)狭くなつた部分。普通は「おおと」と清んで読むようである。「そ」は係助詞。奈良時代は清んで読んだ場合が多いようだが、重綾自身がどう読んでいたかは不明。はしめより―当初から。東西の門ができる前から。大伴坂上郎女「初めより長く言ひつつ頼めずはかかる思ひに逢はましものか」。然ありけらし―田辺福麻呂歌集「はしけやしかくありけるか(如此在家留可)」。大海原―「おほみばら」、「わたのはら」等の読み(五字)も考えられるが、そのような表記の例はないので、普通に「おほうなばら」で、字余り(あるいは五モーラで読んだか)と考える。舒明天皇「国原は煙立ち立つ海原は鷗立ち立つ」。「うなばら」は「うみはら」の転。上代では清んで「うなばら」と読んでいたが、重綾(及び読者)の読みは不明。柿本人麻呂「大船に真楫しじ貫き海原(宇奈波良)を漕ぎ出て渡る月人壮士」。「大海原」の用例は少ないが、山部赤人「印南野の大海の原の荒栲の藤井の浦に鮪釣ると」。土御門院「楫をたえ大海の原に行舟の跡はかもなき世をいかにせん」。また、万葉集一〇八九「大海は島もあらなくに海原やたゆたふ波にたてる白雲」を意識するであろう。八重折る波は―八は上古では、大きな数を示す。何重にも折りたたまれたような波。次々と波が押し寄せてくる感じ。万葉集一一六八「今日もかも沖つ玉藻は白波の八重折るが上に乱れてあるらむ」。

雲井なす―雲が出来て、かかっている状態。遠景の描写。枕詞としては、「遠く」にかかる。長田王「隼人の薩摩の瀬戸を雲居なす遠くも我れは今日見つるかも」。また、雲のように揺れ動く心の意から、「心」にかかる枕詞で、ここでは関係ないが、荒ぶる大海を目にした不安な気持ちに相通ずるかも知れない。大伴池主「雲居なす心もしのに立つ霧の思ひ過ぐさず」。澳にひろこり―「澳」、「奥」、「沖」は、漢字の本来の意味を離れて、「おき」の当て字として用いられる。山上憶良「海原の辺にもおき（奥）にも」。「ひろこり」は、広くなる。広がる。枕草子「朴に紫の紙はりたる扇、ひろごりながらある」。歌語としては用いないようだが、上古的な雰囲気をもつ言葉と考えたのであろう。壁立てる―壁のようにたっている。橘曙覧「壁立てるいはほとりて天地にとどろきわたる瀧の音かな」。岩穂にくたけ―「いはほ」は巨大な岩。丹生王「およづれのたはこととも高山のいはほ（石穂）の上に君が臥やせる」。万葉集二七一六「高山ゆ出で来る水の岩に触れ砕けてぞ思ふ妹に逢はぬ夜は」。うつらなる―中身がなく空っぽのこと。「うつろ」と同じ。和英語林集成「クリノミガウツラにナツタ」（『日国』）。『蝮園集』も「うつら」に作る。重綾は、上古語と考えたか。実際は「うつら」は、古語では、「はつきりと」「まざまざと」の意で用いられる。此窟戸も―序の注で述べたように。洞窟の門のこと。博通法師「石室戸に立てる松の木汝を見れば昔の人を相見ることし」。た、ゆりにゆりかくやすと―「ゆる」は古くは四段活用で、「ゆり」は連用形。「ただ」のあとに動詞の連用形を繰り返すのは、和歌の措辞としては見ないが、物語の常套。『伊勢物語』「せむかたもなくてただ泣きに泣きけり」。物語性のある長歌として、通俗的な言葉遣いを愛したか。「くやす」は難解だが、「崩す」の意の上古語「くやす」。日本書紀・仁徳紀「みかしほ播磨速待いはくやすかしくくくとも吾養はむ」。ただ、テキストによっては「くだす」に作るし、文意も不明。同意の語に「くえる（くゆ）」がある。万葉集六八七「早川の塞きに塞くともなほやくえなむ」。『日葡辞書』にも、「くやす」は「大きな塊などをくだく」意として掲載されている（『日国』）。「か」は、複合動詞「ゆりくやす」の間にいれて疑問を表している。おもふまで―柿本人麻呂「み雪降る冬の林につむじかもし巻き渡ると思ふまで聞きの長く引き放つ矢の繁けく」。聞のかしく―連用形を用いて「聞く」を名詞化した言い方。前の注の柿本人麻呂の歌にも出てくる。聞くことすら恐れ多い。現にし―夢ではない現実世界で。「し」は

強調の副助詞。大伴家持「敷栲の袖返しつ寝る夜おちず夢には見れどうつにし直にあらねば恋しけく千重に積もりぬ」。見のあやしく―「見る」の連用形を名詞化したものとして用いる。大伴家持「山見れば見の羨しく川見れば見のさやく」。千早振―神の枕詞。勢い激しくふるまう、強暴であるの意の「ちはやぶ」の連体形。想像を絶した荒ぶる神のニュアンスが込められているかもしれない。柿本人麻呂「ちはやぶる人を和（やわ）せと奉ろはぬ国を治めと」。柿本人麻呂歌集「ちはやぶる（千早振）神の持たせる命をば誰がためにかも長く欲りせむ」。在原業平「ちはやぶる神代も聞かず竜田川唐紅に水くくるとは」。神のみあとと―万葉集一九六六「風に散る花橋を袖に受けて君がみ跡と偲ひつるかも」。語継ぎいづくなへに―山部赤人「語り継ぎ言ひ継ぎ行かむ富士の高嶺は」「なへに」は、・・・とともに、ちょうどそのときに。語源説には、「なる上に」、「並めて」等がある。上古調の措辞。柿本人麻呂「黄葉の散りゆくなへに玉梓の使を見れば逢ひし日思ほゆ」。出雲人の―直接の関係はないが、柿本人麻呂に、溺死した「出雲娘子」を弔う歌が二首ある。「山の際ゆ出雲の子らは霧なれや吉野の山の嶺にたなびく」、「八雲さす出雲の子らが黒髪は吉野の川の沖になづさふ」。吾にかたらく―笠金村「立ち留まり吾に語らく」。大伴家持「玉梓の道來る人の伝て言に吾に語らく」。つらくに―よくよく。つくづく。坂門人足「巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ偲はな巨勢の春野を」。いにしへおもへは―遺跡を前にして、いにしえを思うのは、万葉集の常套。山部赤人「見るごとに音のみし泣かゆいにしへ思へば」。天なるや―天上世界にいる。「や」は詠嘆。国つ神に対して、天つ神であることを指す。「天なるや月日のごとく我が思へる君が日に異に老ゆらく惜しも」。古くは「天」は「あめ」と読んだ。吉佐貝比咩の―この表記は何の書によるかわからぬが、要するに「キサカイ（ヒ）ヒメ」。大名持神のみことの―「大名持」は大國主命の一名。『日本書紀』、『古事記』では、「大己貴」と表記。『万葉集』では、「大汝」。『三代実録』『延喜式』に至って、「大名持」の表記が現れる。現身を―「うつしみ」は、近世の国学者が、上代語の「うつしおみ」「うつそみ」「うつせみ」「うつせみ」の原義を「顕しき身」と解釈したところから生じた語。現世の人の身（『日国』）。要するに魂ではなくて、肉体。重祿も国学者として、「うつしみ」と読んだと思われる。上代語ならば、「うつせみ」と読むべきところ。ひたしいかすと―古事記「乃ち蜃貝比賣と蛤貝比賣を遣して作り活かしめき。爾くして

蜆貝比賣、きさげ集めて、蛤貝比賣、待ち承けて、母（おも）の乳汁（ちじる）と塗りしかば、麗しき壯夫（おとこ）と成りて出で遊び行きき」をもととするであろう。「ひたす」は、乳汁を塗ることをいうのかもしれないが、海水に浸す療法（潮湯治）かもしれない。因幡の白兔神話を意識するか。古事記では、八十神は兔に「此の海鹽を浴（あ）む」ことを勧め（結果はひどいことになるが）、大国主命は「水を以ちて汝が身を洗」うことを勧めている。「と」は、「とて」。けたしくも「けだし」「けだしく」「けだしくも」は推量の意をあらわす副詞。もしかすると。あるいは。おそらく。「む」「らむ」「けむ」「べし」などの推量の助動詞で受ける。万葉集二九二九「なぞ鹿のわび鳴きすなるけだしくも秋野の萩や繁く散るらむ」。こゝに來まして「ここ」は、他でもないここ、眼前の風景にそんな過去があつたのかという驚き、そんなここに自分が今いる神秘に打たれる感覚が込められている。万葉集一〇七八「この月のここに來たれば今とかも妹が出で立ち待ちつつあるらむ」。「ます」は、上古においては尊敬の助動詞。坂上郎女「問ひ放くるうがらはらからなき国に渡り來まして」。八十神を―八十は多くの数を指す。大国主命をいじめ殺した兄達。古事記「故、此の大国主の神の兄弟は八十神坐しき」。避てましけん―『古事記』には、大国主命が八十神を避けて諸方に隠れる描写がしばしばある。そして、結局は八十神の方が、大国主命を避けることになる。古事記「故、此の大国主の神の兄弟は八十神坐しき。然れども皆國を大国主の神に避（や）りき」。あと、ころ―本來は、足で踏んだところ。足跡。見る影もなく變つた遺跡をしばしば指す。万葉集一二六七「もしきの大宮人の踏みし跡ところ沖つ波來寄らずありせば失せずあらましを」。かくこそあれと―長意吉麻呂「蓮葉はかくこそあるもの意吉麻呂が家なるものは芋の葉にあらし」。紀貫之「世中はかくこそ有けれ吹風のめに見ぬ人も恋しかりけり」。つはらかに―「つばら」より派生。くわしく。すみずみまで残らず十分に。つまびらかに。額田王「つばらにも見つつ行かむを」。大伴家持「奥山の八つ峰の椿つばらかに今日は暮らさねますらをの伴」。かたるをきは―歌語としては、古い用例を見ないが、『源氏物語』にしばしば見える表現。須磨「京の人の語るを聞けば」。物語の常套語を、長歌に利用。「かたらく」と先述して、会話を引用した後、「とかたるをきけば」と語を重複して呼応するのは、古代風。うへしこそ―「うべ（むべ）」より派生。「し」は強意の副助詞。なるほどまあ。いかにも。もつとも。笠金村「こ

こ見ればうべし神代ゆ始めけらしも」、大伴家持「夜くたちて鳴く川千鳥うべしこそ昔の人も思ひ来にけれ」。八洲の国の―「八洲」は、多くの島のある国の意。日本の国の美称。大八洲(おおよしま)。古事記「八千矛の神の命は八島国妻まさかかねて」(大國主命の歌)。国中とも―「くぬち」は「くにうち」の音変化。山上憶良「悔しかもかく知らませば青丹よくぬちことごと見せましものを」。おもほえなくも―『蝸園集』は「おもほえなくに」に作る。「おもほえなくも」の形は万葉集に用例を見ない。古今和歌集読人不知「遠近のたつきもしらぬ山中におぼつかなくも呼子鳥哉」等からの類推で、刻字工が誤ったか。「おもほゆ」は「おもふ」未然形＋自発の助動詞「ゆ」の転で、自然と思われるの意。「なく」は、否定の助動詞「ず」の連体形「ぬ」＋名詞化する接尾詞「あく」。「に」あるいは「も」は逆接(といつても、ここでは「が」程度の意味で軽く後に続けている)。全体としては、思われぬが、の意。山部赤人「沖つ島荒磯の玉藻潮干満ちい隠りゆかば思ほえむかも」、万葉集一四一三「庭つ鳥鶏の垂り尾の乱れ尾の長き心も思ほえぬかも」。紀貫之「色もなき心を人にそめしよりうつろはんとはおもほえなくに」。現世に―「うつしよ」と読むと思われるが、仏教語「現世」の和訳及びそれに影響を受けた神道語であつて、歌語ではないようである。高田女王「この世には(現世尔波)人言繁し来む世にも(来世尔毛)逢はむ我が背子今ならずとも」では、「このよ」と読ませ、来世と対にして、仏教語として用いる。ここでは、(太古の神話世界では無く)現在の現実日常の世界という程度の意味。こ、たさかりて―「ここだ」は数量の多い様、ひいて程度の甚だしい様。万葉集一一八〇「荒磯越す波をかしこみ淡路島見ずや過ぎなむここだ近きを」。「さかる」は遠く離れる。遠さかる。万葉集三六六八遣新羅使「大和をも遠く離りて岩が根の荒き島根に宿りする君」。あやしくも―「あやし」は不思議で、神秘的な様を、驚きをもって感嘆したことは。大伴池主「相思はずあるらむ君をあやしくも嘆きわたるか人の問ふまで」。万葉集一三七一「ひさかたの雨には着ぬをあやしくも我が衣手は干る時なきか」。神さひたてれ―「かむ(ん)さぶ」は「かみさぶ」の古い形で、古びて神々しく見える、荘厳で神秘的であるの意。国学者である重祿自身は、「かむさびたてれ」と読んだであろう。後の「神崎(かみさき)」との語呂もよい。藤原宮御井歌「耳成の青菅山は背面の大御門よろしなへ神さび立てり」。紀鹿人「茂岡に神さび立ちて栄えたる千代松の木の年の知らなく」。補助動詞「た

つ」は、「・・・する程度が甚だしい(いきりたつ)」、「・・・し始める(思い立つ)」等のニュアンスがあるが、用例から考えて、単に厳然として屹立するようなことを言っていると思われる。「うべしこそ」を受けて、「たてれ」と係り結びにしている。是の神崎―長田王「聞きしごとまこと尊くくすしくも神さびをるかこれの水島」を明らかに意識する。「これの」も、他でもないこの、という強いニュアンス。最初の「出雲のや」以後の地名列挙に対応。神崎は風土記以来の地名で、序の注にもいったように、「かんだぎ」の読みが定着しているが、ここはあるいは「かみさき」と読んで、清澄な響きを愛したかもしれない。このあとに、門脇重綾の『蝮園集』では、小字注で「出雲風土記に拠る。或人云、風土記にはゆる佐田大神は猿田彦神なりとぞ」と付記がある。くきとより吾漕来れは―万葉集によく見る表現。柿本人麻呂「継ぎ来る那珂の港ゆ船浮けて我が漕ぎ来れば」。まかみふる―「真髪触奇稲田媛」(まかみふるくしなだひめ。『日本書紀』)により、櫛の枕詞のように用いている。櫛が髪に触れるとは、櫛で髪をとくことであろう。あるいは、スサノオが姫を櫛に変えて髪につけたことをいうか。「ま」は美称。妹か櫛島―櫛島は松江市島根町加賀の桂島の東方、潜戸の南方にある。現在は桂島と結ばれている。現在とても櫛のようには見えないう丸っこい島であるが、西側の裏手の方に岩場が数カ所突き出ており、遠くから見たら櫛の歯のように見えるたろうか。加賀漁港に帰る途中に見える。『出雲国風土記』「櫛嶋 周二百三十歩。高一十丈。〔有松林〕。櫛を愛人にとえる、あるいは愛人と関連したものとして詠むことは、万葉集にしばしばある。湯原王「あきづ羽の袖振る妹を玉櫛笥奥に思ふを見たまへ我が君」。藤原麻呂「娘子らが玉櫛笥なる玉櫛の神さびげむも妹に逢はずあれば」。波のまにみゆ―万葉二二三三「娘子らが織る機の上を真櫛持ち搔上げ栲島波の間ゆ見ゆ」。栲島は「たこしま」。現在の中海に浮かぶ大根島であるという。ちなみに、門脇重綾には、「出雲国蛭蝮(たこ)島の牡丹見にもものしける時」という長歌がある。

\*前半は、潜戸を舟で探検し、その偉大さに打たれて、風土記の物語と実見の景勝を記し、後半は古事記の大国主命蘇生の伝説の地とする、出雲人の説を記す。そして、時代の先後もわからぬ、矛盾した物語や神統をそのまま受け入れて、だからこそ神は不思議なのだ、非合理ゆえに人知をこえて神々しいと、強引に結論づける。

反歌では、そのような夢のような時間を過ごしたのち、重綾は潜戸をはなれ、暗黒の世界から、明るい現実世界に戻っていくが、夢幻世界を完全に離脱したのではなく、神話的な檜島の景色が目に入ってくる。ただ、それは荒ぶる神と違って、あくまでも優しく、女性的な穏やかさのある風景であり、重綾はほっと人心地がつくのである。

57

黄金弓こがねゆみ とらし、世よより やみくやみに みいつかかやく かか、の神崎かみざき

長谷川はせがわ 龍衛たつえ

【訳】 神が黄金の弓を手におとりになった、太古の時代より、あらゆる闇という闇に、神の御稜威がかかやいてい

る、この加賀の神崎には。

【注】黄金弓—門脇重綾は、「投矢」としかいわぬが、「風土記」では「金弓」といつている。これを「かねのゆみ」と読まず、「こがねのゆみ」と読んで、輝く黄金製の弓だとした。弓矢で、東門、西門に穴をあけたことではなく、そもそも、弓が母子神のもとに流れてきたことを重視するのである。「黄金」は『万葉集』では「くがね」と読むが、次の歌に仮名で書いてあるように、ここでは「こがね」と読んでいる。大伴家持「天皇の御代栄えむと東なる陸奥山にくがね(金)咲く」。山上憶良「銀もくがね(金)も玉も何せむにまされる宝子にしかめやも」。平安以後は「こがね」。惠慶法師「一卷にちちのこがねをこめたれば人こそなけれ声は残れり」。とらし、世より—「とらし、世より」は、もと、「とらした世より」に作る。今正す。とらしし↓とらし、↓「た」の変体仮名(多)と刻工が読み間違える↓仮名の「太(た)」に改めるといふ経緯で、こうなったのではないだろうか。「とる」の未然形+上代尊敬の助動詞「し」(四段活用)の連用形+過去の助動詞「き」の連体形。問人老「み執らしの梓の弓の中弭の音すなり」。山上憶良「御心を鎮めたまふとい取らして斎ひたまひし真玉なす二つの石を」。万葉集三三三二四「刺し柳根張り梓を大御手に取らし賜ひて遊ばしし我が大君を」。この弓を取ったのは誰か。佐太大神か、キサカイヒメか。重綾が躊躇なく佐田大神とするのに対して、龍衛は風土記の記述の誤読とみなし、キサカイヒメと考えていたのではないか。加賀神社は本来キサカイヒメを祭るものだったはずだという神道家としての確信がある。ただ、風土記の記述もいろいろ

に解釈できるので、主語を明言しなかったのではないか。佐田大神を祭るためには、佐田神社がある。やみくに「闇」を重ねて、あらゆる闇にの意とした。何もできないさまや正気や分別を失うさまを表す副詞の「やみやみ」では、文意に沿わないし、「やみやみ」というはずである。また、歌語として用いられない。みいつかかやくーみいつ（御稜威）は、「いつ（厳）」の尊敬語。御威光。御威勢。「いつ」は本来斎（い）み清めて、神聖になったもの。出雲国造神賀詞「嚴幣の緒結び」。さらに、その神聖さが荒ぶる方向に向かい、神の威力が強烈なことを意味するようになった。古事記「いつの男建をたけびふみ建たけびて」。「みいつ（御稜威）」は、祝詞で使われる程度であった（長谷川龍衛は大社神官。重綾も含めて、歌人は神社関係者が多い）が、明治以後、天皇の威光を示す語として用いられるようになった。「かかやく」は、古くは清んで読んだ。こゝも加賀（かか）の地名由来として、清んで読まなくてはならない。『風土記』加賀郷（補綴部分）に「光加加明（かかあく）也。故に加加と云う。〔神龜三年（七二六年）字を加賀に改む。〕とあった。か、の神崎―「加賀神崎」として『風土記』に掲出されているのをそのまま用いた。重綾が「加賀」と「神崎」に分解して、歌の最初の方と最後に配したのとは違って、原典至上主義。出雲の間として、風土記以来の地名称呼を尊重する。「かかのかんざき」と読んでよいであろう。

\*ここから島根の歌人達の作品となる。明らかに門脇重綾の作品を読んだ上で、彼らは連れだつて潜戸に赴き、歌会を開いたのである。重綾の作品を尊崇しつつも、その表現が必ずしも「風土記」の記述にしたがっていないことを憾みとし、本来はこうであつたはずだと主張する。『風土記』の「金弓」を、矢じりが鉄製であつたなどと解釈せずに、全体が黄金の弓であり、母子神のもとに流れ着いた時点で、すでに洞窟は輝きだしたのでと強弁する。重綾の言うように、矢で穴をあけたから、光が満ちたのではない。弓をとる、すなわち矢を放つことではないのだ。それでは、『風土記』の記述を浅く読んでいることになる。外光によつて潜戸が輝いていのではない、神的、靈的な目に見えぬ光、御稜威によつて輝いているのだ。だから、洞内にはまだまだ暗いところが多いが、その闇の隅々も実は輝いているのだ。真夜中でも輝いているかもしれない。これこそが、この土地が輝く意味の「加賀」という名をもつ由来である。普通の光で輝いていのではないのである。まさに、神の岬「神崎」の名にふさわし



じっくりと神の恩寵に感謝する様子がかがえる。御稜威を持つ荒ぶる神ではなく、仁慈の光で闇を払ってくれた優しい神。この歌の主人公は、佐太大神ではなくて、やはりキサカイヒメであろう。最後も「けむ」で、断言せずに穏やかに終わっている。

59 千早振ちはやぶる 神代かみよもかくや 霞かすみけむ くきとまづいの沖のぶまきの 春はるの曙あけぼの

【訳】(ちはやぶる) 神の時代もこのようにかすんでいたのだろうか。潜戸のおきの春の曙。

【注】千早振―「神」にかかる枕詞。門脇重綾の長歌の注に既出。こども、現在の我々の想像を絶する荒れ狂った神のニュアンスがあるだろう。だが、その神のいた(いる)潜戸を離れて、港に向かっているのである。この歌は、在原業平「ちはやぶる神代もきかず竜田川から紅に水くくるとは」をすこしひねった言い方。業平は、眼前の美を、神代を超えるものとして賛美するが、逆にこの歌は、恐ろしい神々がいた時代も今と同様穏やかなものだったのではないか、潜戸から離れて、一息ついたところで神代を懐かしむのである。神代もかくや―中大兄皇子「香具山は畝傍を愛しと耳成と相争ひき神代よりかくにあるらし古もしかにあれこそうつせみも妻を争ふらしき」。「かく」は万葉調の堅い言い方。霞けむ―霞に春の美を感じるのは平安調であろう。源具親「難波渦かすまぬ浪も霞けりうつるもくもる朧月夜に」。くきとの沖の―東門から舟が出て、春光にやわらかく包まれていくような情景を思い浮かべればよいのだろう。春の曙―二品法親王「梅が枝の花に木つたふ鶯の声さへにほふ春の曙」、前左兵衛督惟方「たちのぼる煙をだにも見るべきに霞にまがふ春の曙」、伏見院「かすみゆく波路の舟もほのかなりまつらか沖の春の曙」。

『枕草子』冒頭の「春は曙」が想起されるように、平安朝の穏やかな美意識で締めくくる。  
\*潜戸のすばらしさ、おそろしさに心揺らされ、呆然としたのち、外に出ると霞がかかった海が見える。朝日が潜戸の洞窟にさすのを見るは、本当に感動的だそうだが、それを見に行ったのか。潜戸の中は神話世界、人間世界からお

そろしく隔絶した世界だったが、神代もこのような霞が外にかかっていただろう。それなら、神の古代世界も恐れるべきものではないかもしれない。こうして、ふだんの歌人としての自分にもどった。歌の調子も、万葉調から、古今調へ。「千早振」とか「神代」というとことごとしいが、それは遠い過去へのなつかしみであり、むしろ在原業平の歌のように、上代の莊嚴を意識しつつも、現前の美を楽しみむ気持ちになっているのである。前半の「か」音の連続は堅い調子で、神への畏敬がまだ残るが、後半は柔らかな「の」音の連続がだらだらと続き、穏やかな日常現在への回帰を表す。あたかも、重綾が反歌で優しい恋の気分で終わらせたとのに倣ったかのようである。

60 乳岩ちらいわは 涼すずし寝ねた子こも 眼めをままませ  
まつえ 松江 也やし丈じょう

【訳】 潜戸に子供を連れて遊覧してみたが、折からの暑さで子供がぐでつとして寝てしまった。洞内は涼しい。乳岩からは、水のしずくが乳のようにしたたつて、冷たい。おまえの好きなお乳だよ。寝た子は起こすなというけれど、せっかくだ、水のしずくが顔に滴って目をさまして見物するがよい。

【注】 也丈―本名不明。山内曲川の弟子筋には違いない。曲川と同じく松江の人。明治初めの漢詩・俳諧雑誌『風流新誌』にその作品が見える。明治十四年二月発行『風流新誌』第壹号「庵へ来る人の見て居る柳かな 也丈」。同年四月発行第二号「追おろす家鴨や河岸の朝霞 也丈」。平凡な日常の小さな出来事を楽しむ匂風と見える。乳岩は―乳房石、乳汁石ともいう。北門と東門の間辺りの天井に、乳房の形をした大小二つの石が垂れ下がっている。その靈験談は、先に引用した『懷橋談』に詳しい。『古事記』や『風土記』のような正統な書には載らない、俗のさわみの民間伝承である。それをこの俳諧は愛した。「乳」自体が卑俗。涼し―夏の季語。外は暑いのに、ふと涼しさを感じるときに用いる。寝た子も―寝た子を起こすとは、せっかく収まった物事に余計な言動をして、再び問題を起こすことのとえ。ここでは、実際に、ぐずる子が寝てほつとしているのであろう。眼をさませ―「さませ」は命令形として解釈したが、疑問が残る。イ段とエ段の混乱により、「さまし」とあるべきところを「さませ」と表記

したかもしれないからである。そうすると洞内の涼しさで目をさましたということ、ぐずっていた子がせっかく寝ていたのという、やっかいがる気持ちも込められているか。もちろん、霊験あらたかな乳岩のしずくを浴び、潜戸の洞内をみる事ができるのは、この子にとって幸せなんだろうけどね、という親らしい思いもあるだろう。

\*卑俗な記述で、現在の潜戸の楽しみ方を指南する。高邁な和歌に対して、卑俗に徹する俳諧の反骨精神が感じられる。潜戸の項の最後に置いて、世俗的、現実的気分で締めくくる。とはいえ、何者かがいて、子供を見守っているような、洞窟の神秘性が感じられ、よくわからないながら古代の神への信心があるようにも思える。また、直接は出せないが、加賀（かか）＝嬢（かかあ）の伝承も意識して、洞窟に、乳をもたらす母性、優しさを感じているのかもしれない。人間が安らかな世界として回帰したがる、子宮の象徴として、洞窟をとらえているような気もする。もしそうならば、歌人、国学者達正統な知識人が描いたのは、荒ぶる、人知でとらえられない恐るべき神であるのに対して、庶民信仰の対象としての仁慈あふれる神が存在することを、也又はやんわりとさとしているのであろうか。

#### 付記

本稿は、

島根大学法文学部山陰研究センター山陰共同研究プロジェクト

近代山陰の政治と文化―「渡部寛一郎関係文書」・「若槻礼次郎関係文書」に見る漢詩と政党政治の関係分析を通して―（課題番号一六一一 期間二〇一六～二〇一八年度 代表 要木純一）

及び、

科研費 基盤研究（〇）近代山陰地域の漢詩と官僚出身政治家の文化教養環境―中国文学と日本史学の学際的研究（研究課題／領域番号16K02366 期間 二〇一六～二〇一八年度 研究代表者 要木純一）

による成果の一部である。